

奇跡のアイコイル1

渡辺 満（静岡県）

§0 はじめに

アイコイルが、暑い地球を涼しくするだろう。

この装置を、例えて言うならば、「100 円入れると、200 円出てくる装置」。

ここに、秘密はない。

同じことをやれば、誰でも、同じ結果を得ることができる。

これは、「ハバードコイル再現2.pdf」の続きである。

繰り返すが、...

巻き数の多いコイルに、鋭いパルス状の電流を入力すると、

（または、鋭いパルス状の磁束を入力すると、）

電磁誘導とは別の、ある起電力が、順方向（電流と同じ方向）に生じる。

僕は、これを、電磁ポテンシャル(Ai)によるものと考え、

「アイ起電力」と呼んだ。

アイ起電力は、現在の物理学では、まだ知られていないものだが、

僕は、これに対する物理学的解釈を与えた。(Dirac の置換え)

詳細 → [フリーエネルギー実現回路2.pdf](#)

アイ起電力の存在を確認するだけの実験なら、次のが参考になる。

[フリーエネルギーの発見\(4\).pdf](#) [フリーエネルギー実現回路1.pdf](#)

アイ起電力は、エネルギー保存則を打ち破る現象であり、

フリーエネルギーの発生源となる。

この他にも、フリーエネルギーとして、「磁束の衝突効果」があるが、

その効果はアイ起電力よりも、ずっと弱いので、

アイ起電力の補助用として使う。

一般に、“アイ起電力”を発生させる目的で、作られたコイルを、

「アイコイル」と呼ぶことにする。

テスラコイルは明らかに、アイコイルである。

アイコイルをうまく使えば、フリーエネルギー装置を作ることができる。

すなわち、入力より出力の大きい装置を、である。

すべては、アイコイルを如何に、うまく使うかに、かかっている。

この装置は、次の3つの部分から成る。

- 1)パルス発生回路&コイル
- 2)共振回路&コイル
- 3)出力回路&コイル

前回は、共振コイルのみを、アイコイルとしたが、
今回は、さらに、駆動コイルもアイコイルとした。
一般に、アイコイルは、巻き数が多いが、
実験によって、適当なコアを入れれば、500回巻きぐらいから、
アイコイルになることが、わかっている。

これまで電源は、
ACアダプター DC6V(300mA)の1つのみを使用してきたが、
今回は、これを、

- ・ICボード用のACアダプターDC5V、
- ・本体用のACアダプター DC6V(300mA)、

の2つにした。

このようにしないと、どんなに工夫をしたとしても、
パルス発生や共振からの影響が、ICボードに及び、
ICが壊れたり、誤動作したりする、可能性がある。

ICは、TC4027BPの1つのみを使用。

TC4027BPは貴重なものなので、大事に扱いたい、という気持ちがある。

すでに過去に、1つ壊れた。

ネットで検索したら、“生産中止予定”みたいになっていた。

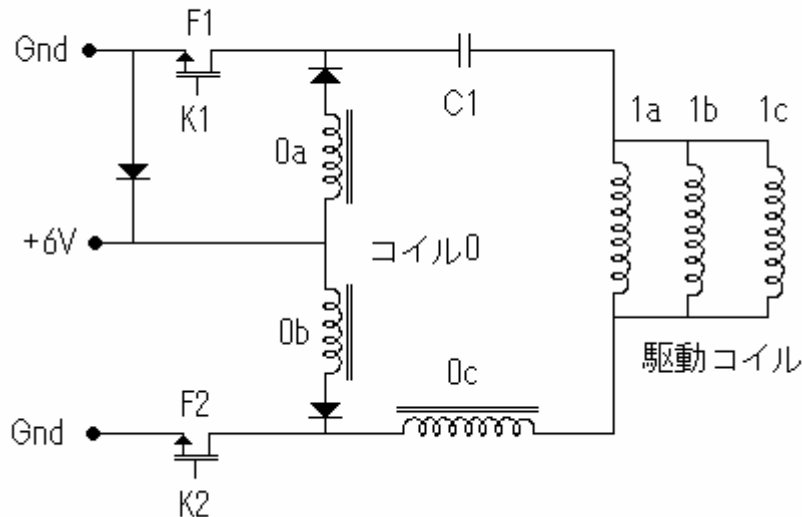
一体、どうなってるんだよ！

技術者が使い方を、知らないだけなんだよ！ほんとにまことに。

出力は、家庭用の100V5W電球(昔からのフィラメント電球)を光らせ、
その明るさより判定した。

§ 1 両方向パルス発生回路

F1,F2= MOSFET=2sk3799



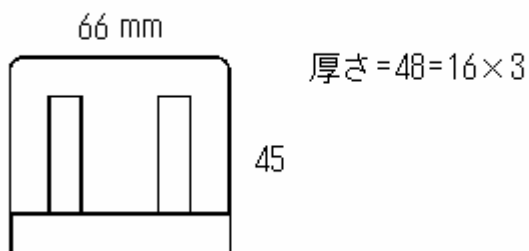
C1=0.05 μ F

● コイル 0 (0a,0b,0c)

コイル0は、パルス状の電流を発生させるためのもので、0a,0b,0cの3つからなる。

まずは、強力なコイル0が必要である。

コア EI60 3枚重ね



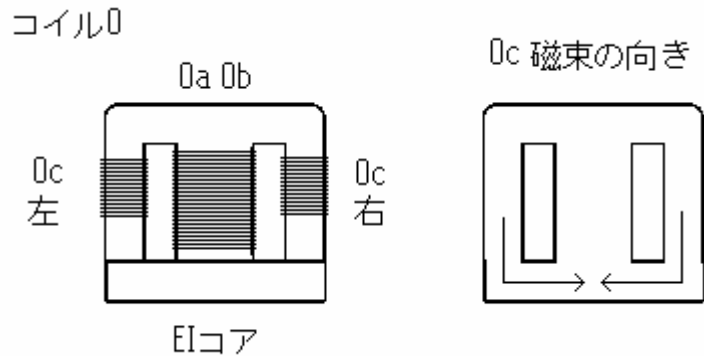
前回は、トロイダルコアを用いたが、今回は、EIコアを用いる。

EIコアは、かなり以前から、試みてはいたが、今回はそれが成功、よい結果が出て、強いパルスができた。

たぶん、「磁束の衝突効果」が起きているせいだろう。

用いたコアは、EI-60を3枚重ねたもの。

その上へ、コイル 0a,0b,0c の3つを巻いた。



0a,0b は、どちらも中央の太い部分へ巻くが、電源から電流が流れ込むとき、0a,0b の磁束が、互いに逆向きになるように、結線する。

0c は 2 つの部分に分け、左右のコアに巻く。磁束の方向は、図の右のように、結線する。(電流が逆向きのときは、磁束も逆になる。)

図のように、コイル 0c 左右の磁束は、中央で衝突する。このとき、磁束の衝突効果で、発生するパルスが強くなるのだと思う。

コイル 0a,0b=各々約 35 回巻き、0c=約 40 回巻き×2 個

● 駆動コイル

今回は、駆動コイルをアイコイルにすることが、目標である。

この装置では、...

駆動コイルは、自身の発生するパルス状の磁束を、共振コイルに与えることで、共振コイルにアイ起電力を発生させ、強い共振を起こさせる。

そういう役を、受け持っている。

駆動コイルの磁束が強くなれば、共振も強くなり、出力も大きくなる。

それならば、駆動コイルにアイコイルを起用して、

コイル 0 からのパルスを、さらに、このアイコイルで増幅したらどうか。

そう考えた。

一方で、これは、フリーエネルギーの発生源にもなるのでよい。

コイル 0 を強力にしたのは、このための準備である。

実験によって、適当なコアを入れれば、500 回巻きぐらいから、アイコイルになることが、わかっている。

アイコイルの巻き数を増やせば、アイ起電力も強くなるだろうが、一方で、インダクタンス L が大きくなり、パルスが通りにくくなる。パルスが楽に通らなければ、そもそもアイコイルにならない。(アイ起電力が発生しない。) ここが、ジレンマである。

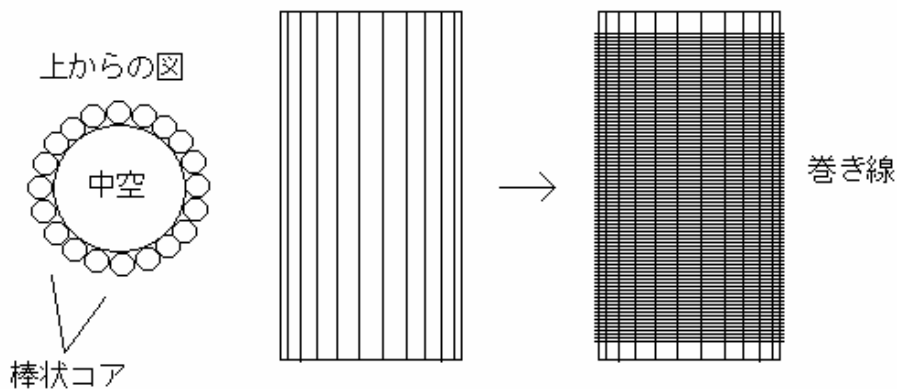
コイル 0a, 0b の巻き数を、ある程度増やした上で、周波数を下げれば、コイル 0 の発するパルスは強くなる。

しかし一方で、周波数を下げれば、共振の方が弱くなる。

周波数を下げずに、パルスを強くすることが、必要なのだ。

● 駆動コイル 1a

下記のような中空コアコイル。



これはすでに、「フリーエネルギー実現回路1.pdf」で用いた。(楽をするために、過去に作ったものを、使い回している。)

もう1度、詳細を書くと、

直径 7cmΦ、長さ 20cm の紙管を用意し、その回りへ、

棒状フェライトコア 15mmΦ、18cm 長を、18 本並べて、(購入先:ラジオ少年)

10cmΦ、長さ 18cm の中空のコアを作る。

その回りに、0.65mmΦのポリウレタン導線 170m を巻く。

(約 500 回巻き)

このコイルは、それ自身アイコイルになるが、この他に、
「中央の中空部分の磁束はゼロになる」という大きな特徴がある。

(こういう現象は、通常の電磁気学の知識で、説明するのはむずかしい。
枠外なのである。コアが入ることで、非線形になるというか何と云うか。
こういう場合は、定量的でなく、むしろ定性的に説明する方が、うまくいく。
あるいは、もっと別の理論的型枠が、必要になるのかもしれない。
なんでもかんでも、Maxwell の方程式から、導き出せると思ったら、
大間違いである。)

この場合、すなわち、発生した磁束は、すべて、このコイルの外側に出て行く。
今回は、この特徴を生かし、このコイルを中心にして、
その周りに、共振コイルを配置した。これが、案外よい結果をもたらした。
(コイルの配置図→ § 3)

● 駆動コイル 1b,1c

駆動コイル 1a だけあれば、1b,1c など、必要ないのでは、
と思うかも知れないが、おもしろいことに、こうすると、回路全体において、
結果として、パルスが強くなる。

1b,1c は、前述した 1a(中空コアコイル)と、
同じぐらいのインダクタンス L を、持つことが要求される。
というのは、駆動コイル 1a,1b,1c は、並列に連結するため、
 L の差が大きいと、 L の小さい駆動コイルのみを、
パルス電流が通ってしまい、よろしくない。
どれも、同じぐらいに通ることが必要である。

(注意： 駆動コイル 1a,1b,1c を直列に連結すると、 L が大きくなって、
パルスが通らなくなる。)

1b,1c は、極太フェライトコア(34mm ϕ 20cm 長)(購入先:ラジオ少年)へ、
500 回~700 回ぐらい巻いた。
さて、この駆動コイル 1b,1c を、どこに置くべきかと迷ったが、
どこに置いても、出力は、変らないように見えた。

● 完全スイッチング回路

前述の回路図を見ると、

2つの MOSFET の右に、2つの整流ダイオードを設置してある。

これによって、コンデンサ C1 の電荷は、K1,K2 が反転する瞬間にしか、
出入りできない。(C1 を含めて、スイッチングしている。)

すなわち、

K1,K2 の反転時、コイル 0 からはパルスが出るが、そのとき同時に、

コンデンサ C1 の電荷もパルスに加わり、

その結果、(条件が整えば)パルスが強くなる。

これには、そういう意図がある。

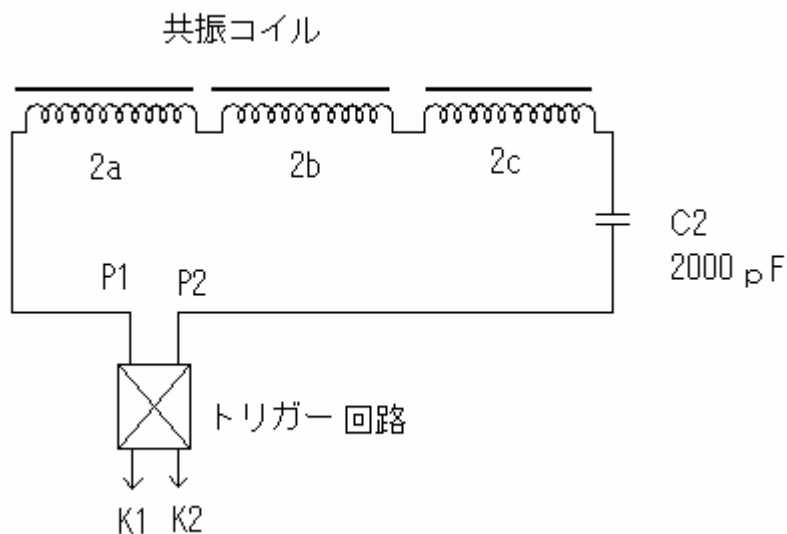
この完全スイッチング回路は、過去にすでに、

フリーエネルギーの発見4.pdf フリーエネルギー実現回路1.pdf

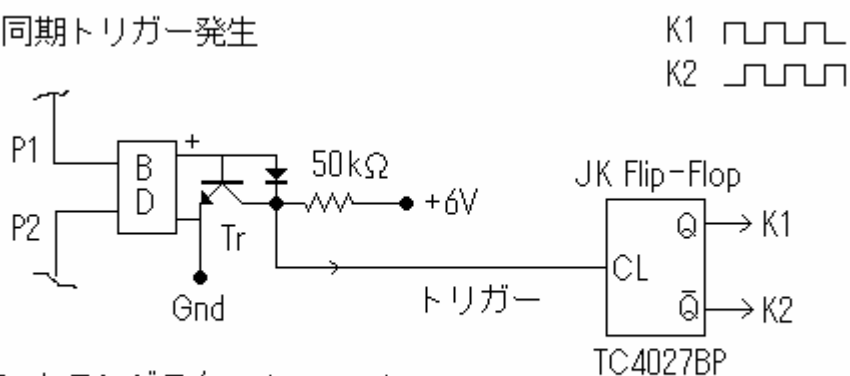
で行っている。

この2つの pdf に、詳細な図示があるので、そちらを見られたい。

§ 2 共振回路



同期トリガー発生



Tr=トランジスタ (2sd2012)

BD=ブリッジダイオード

● 共振コイル(2a,2b,2c)

共振コイルは、前回用いたものと同じで、

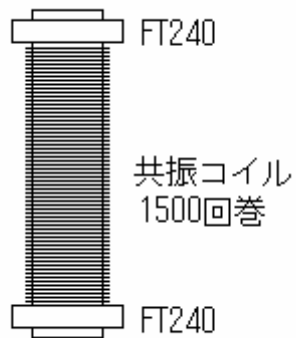
極太フェライトコア(34mmφ20cm長)(購入先:ラジオ少年)

の両端にトロイダルコア(FT240)を、はめたものへ、

導線 170m(約 1500 回)巻いたもの。

これを前述した中空コアコイルの周りへ配置。

(コイルの配置図→ § 3)



●トリガー発生

前回と異なり、入り口の小さなコイルを外した。
今回は、この方がよい、ケースバイケースらしい。

●電源スイッチ ON!

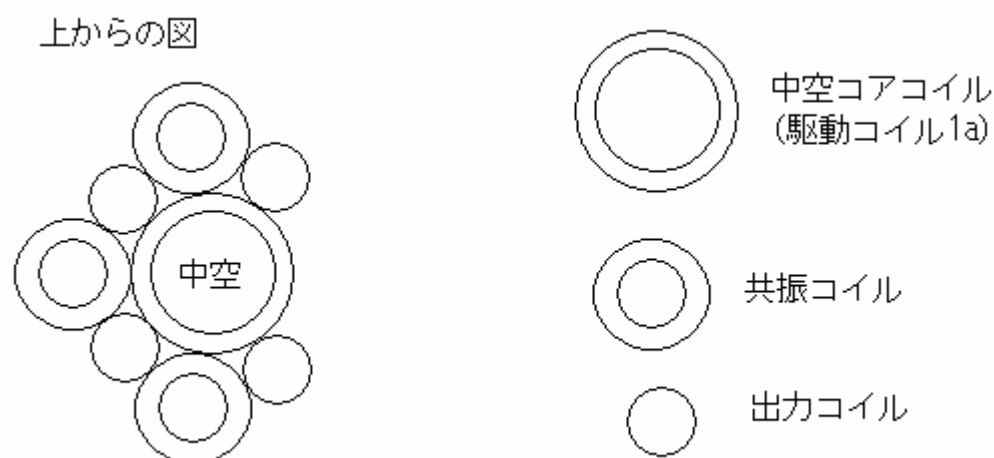
電源は前回同様、ACアダプター DC6V(300mA)を用いた。
電源スイッチ ON で、共振回路は、自動的に発振する。
周波数は約 5kHz。

§3 出力

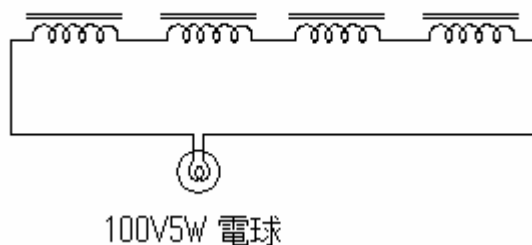
出力コイルは、共振コイルの発する磁束を捕らえ、それを、出力に変えるためのものである。

今回は、極太フェライトコア(34mmφ 20cm 長)(購入先:ラジオ少年)へ、約 300 回巻いたものを 4 本。

これを共振コイルの間に、配置した。(図参照)



出力コイル



今回は、トランスを用いない。

出力の判定は、前回同様、

家庭用の 100V5W 電球(昔からのフィラメント電球)を用いて、その明るさで行った。

(この電球なら、そう簡単には光らないので、返って出力を、評価しやすい。)

その結果、

まだ直接、家庭の 100V コンセントに差し込んだ程には、ならないが、

前回よりは、明らかに明るくなった。

それを眺め、4W ぐらい、出ていると判断した。

電源は、ACアダプター DC6V(300mA)だから、
入力は多くても、 $6V \times 0.3A = 1.8W$ 、すると、
出力/入力 = $4W/1.8W$
ここからおおよそ、出力は、入力の2倍ぐらいだろう、と判定した。

●参考:大きなコンデンサ

以前から、電源+とGndの間に、
数ファラッドもある大きなコンデンサを入れてある。
これは、最初は、別の目的で入れたのだが、
ある日ふと、これが入れてあると、出力が大きくなることに、気がついた。
たぶん、電氣的に安定するためだろうと思うが、
当然だが、このコンデンサによって、入力電力が、増えているわけではない。
このコンデンサは、電気二重層コンデンサ(5F5.4V)を2個直列にして、
2.5F10Vにしたもの。

●あとながき

コイルの配置図を見ればわかるが、中空コアコイルの右側に、
共振コイルと出力コイルを、あと一個ずつ置きそうな、スペースがある。
そこまで、やろうかと思ったが、連日の暑さで、やる気が起きず、
ここまでとした。

ここまで来れば、この装置の完成形が、自ずと見えてくる。
駆動コイル1b,1cも、1aと同様の中空コアコイルにして、
1aと同じように、周りに共振コイルと出力コイルを並べる。
そうすれば、もっと出力が大きくなるだろう。
まだかなり、巻かなければ、ならないが...

... この装置の注目すべき、特筆すべき、大きな特長は、
駆動コイルと共振コイルの数を、うまく増やしていくと、
それに伴って、出力も増えるということである。
一般的に考えれば、中間に、コイルが増えれば、
損失も増えて、出力は減少するのが、普通だろう。
これは、駆動コイルや共振コイル内に、アイ起電力が発生している、
ひとつの証拠になるだろう。

2018年8月発行 V2

著者:渡辺 満, 発行者:渡辺 満

Copyright 渡辺 満 2018年